

長野県新産植物ススヤアカバナ *Epilobium parviflorum* Schreb.
 およびアレチウシノシタグサ *Anchusa arvensis* (L.) M.Bieb. の報告

松田 貴子*・横内 文人**

1. ススヤアカバナ (アカバナ科)

Epilobium parviflorum Schreb.

2016年6月9日、筆者らが安曇野市穂高矢原(標高520m)のワサビ田の耕作放棄地を踏査していた際、高さ1m以上で株立する大型のアカバナ属の一種が一带に生育しているようすを確認した。持ち帰り調べたが図鑑に該当する種の記載がなかったため、横内が横浜市こども植物園の高橋秀男氏に送ったところ、神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男氏によりススヤアカバナ *Epilobium parviflorum* Schreb. と同定されたとの連絡をいただいた。

ススヤアカバナは2002年7月に富山県新湊市(現射水市)で最初に確認され、その後茨城県(2005年)、石川県(2006年)、千葉県(2011年、2015年)で確認されている。いずれも生育地は放棄水田が多いが、射水市では海岸に近い潟湖を埋め立てた湿性草地であった(大原ら2006、大野2015)。

ススヤアカバナは葉や茎に開出する白い毛が密生する。茎上部には花卉の長さ7mm以下のピンク色の花をつけており、アカバナ属の分類で重要な花柱の先端は4裂する。同じく花柱の先端が4裂し、長野県内で生育が確認されているオオアカバナ *Epilobium hirsutum* L. は、花卉が長さ8mm以上で大きく、花柱は雄蕊よりも高く突き出し裂片が開出するのに対し、ススヤアカバナは花卉が7mm以下で花柱は雄蕊とほぼ同じ高さにあって裂片は短く開出しない。またオオアカバナの葉は無柄で抱茎するのに対して、ススヤアカバナの葉の基部にはごく短い葉柄がある等、多くの形質で差が見られる。エゾアカバナ *Epilobium montanum* L. も花柱が4裂するが、草丈が最大1mとやや小型であり、茎の毛が短伏毛または著しく上方に屈曲した短毛である点等で異なる(大原ら2006)。

安曇野市内の生育地は耕作放棄されたワサビ田で、周辺の植生にはオオカワデシヤ、オランダガラシ、エゾノギンギシなどの帰化植物が優占する植生

であった。水面にはオオアカウキクサが見られるところもある。水深は10～20cm程度で完全に冠水しており、日当たりはよい。ススヤアカバナの生育地一帯の個体数はかなり多く、密度高く群生するようなエリアも見られた。その後、松田が約450m離れたワサビ田放棄地でも生育を確認した。安曇野市内における花期は6月9日の時点ではほとんどつぼみで、わずかに開花し始めたところであり、その後9月中旬まで開花を確認した。9月中旬には多くの個体が結実し枯れていたが、場所によってはまだ開花している個体が見られるという状況であった(写真1、2)。

大野(2015)によると、ススヤアカバナの生育地は渡り鳥のルート途上にあり、渡り鳥の羽毛にススヤアカバナの冠毛が付着することによって散布された可能性もあるという。本生育地周辺も冬期に水鳥が飛来することから、その可能性はじゅうぶん考えられる。またススヤアカバナの和名の由来は、サハリン南部のススヤ川河口で記録されたためという。

安曇野市ではワサビ田の耕作放棄地が増加しており、ススヤアカバナの分布拡大に寄与している可能性は高い。今後も踏査を重ね、ススヤアカバナの分布について調査を継続していく予定である。

標本は横浜こども植物園(YCB445342)、神奈川県立生命の星・地球博物館(KPM-NA020822)、長野県環境保全研究所(NAC180812)、信州大学自然科学館(SHIN69838)および安曇野市豊科郷土博物館(No.10001,10002)に収めた。同定協力および資料の提供をいただいた高橋秀男氏、勝山輝男氏に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 大野啓一. 2015. ススヤアカバナが千葉県と佐倉市でみつかる. 千葉県植物誌資料 29: 285-287
 大原隆明・高木末吉・安嶋隆・堀内伸秀. 2006. ススヤアカバナ *Epilobium parviflorum* を日本のフロラに追加する. 植物地理・分類研究 54(1): 74-77

* 安曇野市豊科郷土博物館

〒399-8205 長野県安曇野市豊科 4289-8

** 横内文人 〒399-7402 長野県松本市会田 110

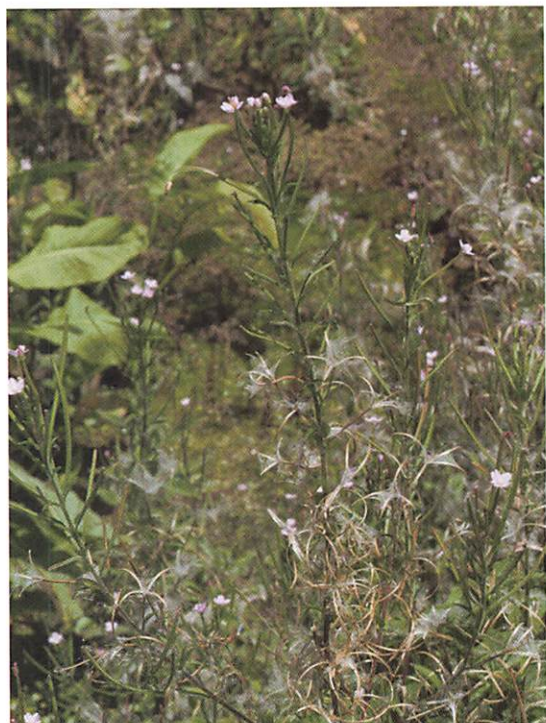


写真1：ススヤアカバナの開花結実



写真2：ススヤアカバナの花



写真3：アレチウシノシタグサの開花状況



写真4：アレチウシノシタグサは植物体全体に粗毛が密生



写真5：アレチウシノシタグサの花

2. アレチウシノシタグサ (ムラサキ科)

Anchusa arvensis (L.) M.Bieb.

2016年7月12日、長野県松本地方事務所の宮下康司氏から、安曇野市穂高柏原(標高580m)で進められている圃場整備エリアで見慣れない植物があると連絡があり、松田が安曇野市教育委員会の那須野雅好氏とともに植物を確認した。情報を得る中で、ヨーロッパ原産のムラサキ科 *Anchusa arvensis* である可能性が高いことがわかり、国立環境研究所の新入生物データベース (<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/index.html>) により和名は「アレチウシノタケダグサ」であると考えられた。その後、長野県環境保全研究所の大塚孝一氏より、*Anchusa arvensis* はすでに2000年に神奈川県川崎市で採集された報告がなされており(勝山2000)、「アレチウシノシタグサ」という和名がつけられていることを教えていただいた。2007年に発行された「改訂増補 帰化植物便覧」(太刀掛ら、比婆科学教育振興会,2007)および「日本帰化植物写真図鑑第2巻」(植村ら、全国農村教育協会,2010)にも「アレチウシノシタグサ *Anchusa arvensis* (L.) M.Bieb.」として記載があり、これらに従うこととした。

アレチウシノシタグサはヨーロッパ原産の帰化植物である。1年草で、全体に基部が膨れた粗い毛を密生する。葉は互生し葉柄はなく、基部はやや茎を抱く。莖は基部近くまで深く5裂し、粗毛を密生し、萼歯は5個。花冠は青色、筒状で先は5裂し、長さ4~7mm。雄蕊や雌蕊は花冠内部にあり突き出さない(勝山2000)。

安曇野市内の生育地は主に耕作地の土手やその周辺で、およそ500m×300mの範囲で確認された。土はよく転圧され乾燥しており、エノコログサ、シロザ、ハキダメギク、ムラサキツメクサなど、耕作地周辺等に一般的に生育する植生の中に混在して見られた。株の大きさは個体差が大きく、高さ50cmで幅1m近く広げて株立しているような個体から、高さ20cm程度で分枝が少ない個体まで様々であった(写真3~5)。

7月12日の確認時には開花および結実期を迎えていた。花序ははじめ小さく巻いているが、下から順に開花しながら直立し長い穂状となる。確認時、花序の下部では次々と4個の分果となって結実しており、植物体に触れるとポロポロと種が落ち、個

体の下には多数の種が落ちているのが確認された。

生育地の大部分は2015年10月~2016年の冬期にかけて圃場整備の工事が行われた土手であった。長野県松本地方事務所によると、本工事では土壌を敷地外からは持ち込んではいない。また比較的大きな株の個体が密度高く生育していたエリアは本工事より前に造成された土手であった。以上の状況からアレチウシノシタグサは工事以前からすでに生育していたと推察される。種子が圃場整備により拡散しアレチウシノシタグサの生育範囲を広げた可能性が高いが、最初の侵入経路については不明である。

アレチウシノシタグサはアメリカで帰化し耕作地の害草として問題になっていることから、安曇野市教育委員会として局所的に生育している現段階で除去したほうがよいと判断し、筆者ら、安曇野市教育委員会および環境課、長野県松本地方事務所等の関係者で7月22日にアレチウシノシタグサの除去作業を行った。除去した個体数はおおよそ350株にのぼり、すべて焼却処分とした。植物体全体に生えている粗い毛は刺のように皮膚にささるため素手での作業は厳しい状況であった。この粗毛が葉に生えているようすからウシノシタグサ(牛の舌草)という名前が付けられたと思われる。その後9月2日に筆者らで生育地を確認したところ、小さな株が4株確認されたのみであった。種は周辺に多量に散布されているため、来年以降も引き続き生育状況の確認を行う予定である。

標本は横浜こども植物園(YCB445343)、神奈川県立生命の星・地球博物館(KPM-NA0216153)、長野県環境保全研究所(NAC180816)、信州大学自然科学館(SHIN69832)および安曇野市豊科郷土博物館(No.10003~10006)に収めた。同定協力および資料の提供をいただいた大塚孝一氏に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 勝山輝男. 2000. 神奈川県で採集された日本新産を含む4種の帰化植物. 神奈川県誌資料 第21号: 1-2
太刀掛優・中村慎吾編. 2007. 改訂増補 帰化植物便覧. 比婆科学教育振興会: 286
植村修二・勝山輝男・清水矩宏・水田光雄・森田弘彦・廣田伸七・池原直樹. 2010. 日本帰化植物写真図鑑 第2巻: 186